

# 針葉樹会報

第 115 号  
2009 年 6 月



## 目次

シリーズ わが現役時代	
新制一橋山岳部の基礎固めの時代	上原 利夫 2
キリマンジャロ紀行	中川 滋夫 8
回想・キリマンジャロ	遠藤 晶土 9
サファリ報告	小島 和人 11
準備と費用報告	小野 肇 12
中高年のための北海道おすすめ山スキー 20選	田形 祐樹 16
アジア往復旅行 1年2カ月	岡田 健志 22
三月会通信	蛭川 隆夫 23
三四郎会総会の報告	
針葉樹文庫見学会報告	
妙高山遭難事故速報	
甲 辞	
編集後記	
表紙写真「越後三山・丹後山にて 撮影・川名真理	

発行日 2009年6月24日

発行者 針葉樹会  
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報  
第 115 号

編集人 小島 和人  
〒241-0817  
横浜市旭区今宿町 2-60-1  
会報幹事 / 小島和人、井草長雄  
川名真理

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

シリーズ わが現役時代

## 新制一橋山岳部の基礎固めの時代

上原 利夫（昭和33年卒）

はじめに

旧東京商科大学は、昭和28年3月に最後の卒業生を送り出したあと、完全に一橋大学に衣替えをした。「東京商科大学一橋山岳部」も看板をおろし、「一橋大学一橋山岳部」だけの看板になった。「一橋山岳部」が旧制時代と変わらないのは、先見の明というべきか。

私が入学した昭和29年4月の一橋山岳部は、新制大学へ入学した学生ばかりと思いきや、旧制を卒業した中村正司さん（昭和28年卒）と同期入学の鹿俣さん（昭和30年卒）らが学生現役でおられた。針葉樹会名簿は卒業年次の順であるから、誰かが教えてくれないと、このような先輩との付き合い方がわからない。昭和33年卒の私には、知らない人は同期と思う先輩が5人もいる。それは甘利さん・中村幸止さん・福田さん（いずれも昭和31年卒と同期入学）、柴崎さん・中村保さん（い

ずれも昭和32年卒と同期入学）である。昭和32年卒では勝田さん（昭和30年卒と同期入学）と春日井さん（昭和31年卒と同期入学）。昭和31年卒では奥野さん（昭和30年卒と同期入学）がそうである。私と一緒に山岳部室に通った人は知っていることだが、それ以降の後輩のために書いた。卒業を遅らせた先輩は落第生ではないので、不名誉（むしる名誉？）ではないと思う。

山岳部と関係がないようであるのはゼミ。旧制からの過渡期にあつて、理念と行動を結びつけたのは、チーフリーダーを務めたM中さん（旧制最後）、石原さん、吉田さんの三代の功績だった。この三方は、世界的に知られる経済発展の「雁行形態論」を主張された赤松要教授のゼミだった。日本発信の経済学研究者の思想を引いていると思う。

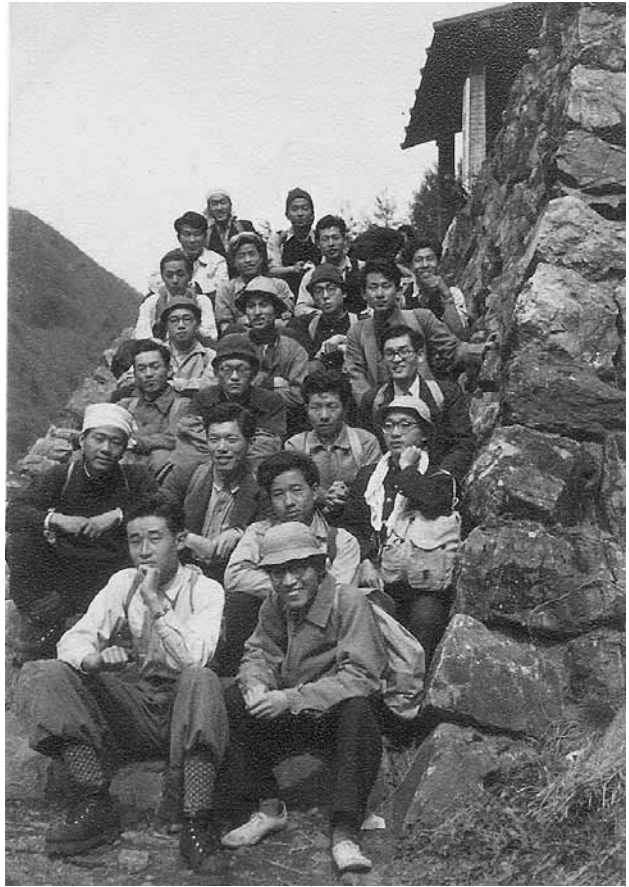
種瀬ゼミの山岳部員がある時期多かつたが、その後少なくなつたのも面白い。私は種瀬ゼミの三期生で、西海と同じ。一期生は甘利さん、二期生は各務さん、五期生は小峰・渡辺、六期生は中島・大賀・小林（進）と続き、八期生の蛭川、十期生の高崎（俊）、十一期生の斎藤（正）と少なくなる。このうち、甘利、渡辺、中島、大賀の諸兄は鬼籍に入つた。種瀬先生は登山中ならゼミの欠席を許された。甘利さんが先鞭をつけたのである。し

かし、昭和40年8月に先生は教授へ昇進され、「経済原論第一」（マルクス経済学）を講じられると、先生の知名度が上がリ、山岳部員がゼミに入り込む余地はなくなつたようだ。種瀬先生は昭和54年に経済学部長、同58年に学長に就任された立派な先生で、山岳部員に理解があつた。

種瀬先生のごとで余談をひとつ。太田可夫教授が山岳部長だつたころ、私が可さんにゼミの相談をしたら、「種瀬の門を叩いてみな」とアドバイスを授かつた。私にとっては大きな転換である。近経（近代経済学）の一橋に入学したが、対立するマル経に向かつたからである。関さん（可さんの後の山岳部長、中山伊知郎ゼミでありながらマル経が専門）によれば、種瀬さんは数学も出来るし近経も詳しい、ということだった。ちなみに、種瀬先生の恩師である杉本栄一先生（入学時は物故）と中山先生（入学時の学長）は論敵であつた。私は、奨学金を奨岳金と読み替えて、年間100日を山で過ごしていたので、近経（右）もマル経（左）も口々に知らない。『資本論』を読まずに、恐慌論をかじつた程度で、左がかつた『青年歌集』を山で唱つていた。太田先生から「自分で考えたことは、自信を持って発言してよい」と元氣付けられ、種瀬先生からは「自分がよいと思うことに打ち込め」

を学んだ。これは旧制から流れている一橋の「自由」の学風かもしれない。

山岳部には学者が多い。一橋大学教授になった、関恒義、勝田有恒、南亮進、阿部謹也(学長)、石弘光(学長)の名が輝く。小樽商大山岳部長を長くやった阿部謹也以外の人は、一橋山岳部部長を務めた。部員の遭難が多発したときは先輩とはいえ「苦労をかけた。大学は違うが、渋谷一郎教授もおられる。異色なのは卒業後アメリカに渡った加地幸雄



1955年4月の春、新入生歓迎登山の日原ヒュッテにて。前列左から、各務、上原、白川、2列目...中村(保)、瀬田、X、X、3列目...篠原、岡、城戸、4列目...X、X、X、宮川(守久)、岡垣、5列目...沢木、吉田、高崎、最後列...甘利、柴崎、佐藤

(同期)で、アリストテレスを専攻してプリストンの博士号を取り、ユタ大学教授になった。中村保は「ヒマラヤの東」を長期にわたって探査し、英国の王立地理学会のバスクメダルを受賞した。私は企業OBになってから一橋大学大学院法学研究科に入り、修士課程2年と博士課程3年で会社法を研究した。入学式では阿部学長(同期)の祝辞を聴き、修了のときは石学長から博士(法学)の学位を授与された。

山の著作物や翻訳、蔵書の多かった故人は、旧制の吉沢一郎・磯野計蔵・増山清太郎・望月達夫・山田亮三、新制の山本健一郎(昭和32年卒)・中島寛(昭和36年卒)らである。平成21年5月に、増山蔵書、山本(健)蔵書を核とした500冊からなる「針葉樹文庫」を南アルプス芦安山岳館(南アルプス市営)に寄贈できたのも、一橋山岳部の実践を尊ぶ学問的素養の表れである。部員の少なくなつた現在は、針葉樹会が伝統を守っている。

80年にわたる山岳部の歴史は、13冊(第1~13号)の部報『針葉樹』により、大正14年から昭和39年までの活動記録からうかがえる。このうち、私の在籍した当時の活動は、第11号と第12号に跨っているので、この2冊を紐ときながら、ここには書かれていないことを思い出し、歴史を補完する役割を果たすことにする。

部報『針葉樹』第11号のころ

私は第11号の編集委員の一人だったが、50年以上昔のことによく覚えていない。戦中・戦後の食糧調達や交通手段の困難なときの部活動は大変だった。その頃のことは、11号で大塚、山田、小林、石井、小泉の先輩諸氏が、昭和14年度から昭和27年度までの13年分(10号とのつなぎ)を分担して書いておられ



1955年夏合宿、剣沢で定着の後、2隊に分かれ縦走。槍への縦走組。五色ヶ原の先輩の慰霊碑の前で。前列左から、岡垣、茂木、佐藤、高崎、宮川(守久)、瀬田、後列左から、朝木、上原、吉田、山田、市川、市畑、沢木、X

る。いずれも6年制(予科3年、本科3年)の時代だった。新制大学の4年制(小平の教養2年、国立の専門2年)になってからの部の基礎については、石原(昭和28・29年度チーフリーダー)、吉田(昭和30年度チーフリーダー)の両氏が書いておられる。

『針葉樹』第11号を飾るのは、戦後になって、それも新制になって、一橋山岳部の伝統を意識した山の記録である。私が入部する前

年の昭和28年度と私が入部した昭和29年度の活動が報告されている。私が入学したときは、旧制時代の先生も授業内容も残っていたから、山岳部も新制になりきっていなかった。中村という部員が旧制で2人、新制で2人おり、S中、M中、Y中、T中と呼ばれていた。針葉樹会の年会費を集めるのを「寄付を貰いに行く」と言っていた。部員で手分けして先輩を勤務先に訪問するのである。私の帰省先は大阪だから、京阪神で勤務する先輩は私が担当した。吉沢、高木、高橋、森、黒田、望月(達)、榎本、船本、宮城、伊藤(助)などの先輩とは、毎年訪ねるので親しくなった。

このよき風習はいつの間にか、なくなってしまう。いまでは、針葉樹会費を銀行口座に振り込むので、先輩と後輩の繋がりが密になりにくい。

先輩が学生の面倒見が良いのは、如水会の伝統であり、針葉樹会も同じである。その影響もあってか、厳しい私立大学山岳部とは違って、上級生は新人にやさしい。新人がバテると助けてくれる。かかる雰囲気がある。夏山やスキー合宿には参加する

が、岩登りはしない、冬山と春山合宿は参加しない、定着合宿のあとの縦走には参加しない、などの選択肢があった。個人山行中心の人もいた。それでいて、一流のクライマーも生まれるのだから、バランスのとれた山岳部だった。私の過ごした4年間はそうだった。

昭和29年入学の新人11名参加の歓迎登山は、4月に入笠山で行われた。6月に小平部屋(10畳敷)が出来たので、先輩のS中さんをはじめ、国立の3、4年生が来室し、26名で部屋開きのコンパを行った。このとき、歌をたくさん教わった。谷川岳合宿は新人6名が参加し、総勢15名。夏用の新テント5張が出来上がり、夏山合宿(涸沢18名と奥又白7名)で初めて使った。このときは1年生5名を含む7名が上野から出発し、家業手伝いのため休学中のY中さんから高崎駅で米を受け取り、上高地經由涸沢へ運んだ。定着合宿後は11名が船窪まで、5名が安房峠まで縦走。この合宿が終わって、勝田さんが就職試験で病気が発覚し、療養のため休学された。秋は、来るべき冬山と春山の偵察やら荷揚げを兼ねて山を歩いた。12月の2年生以上の冬山合宿は遠見尾根から鹿島槍・唐松岳。1年生12名参加のスキー合宿は白馬梅池の成城小屋で総勢20名。3月の春山合宿は横尾、涸沢より前穂高北尾根で13名(うち1年生4名)が参加

した。

昭和29年度の公式山行の日数を部報『針葉樹』第11号から抽出してみた。

新人歓迎登山(入笠山) 2日、谷川岳合宿 3日、夏山定着合宿(奥又白、涸沢) 12日、夏山縦走(涸沢、船窪、涸沢、槍、安房峠) 8日、冬山荷上げ(遠見尾根1回目) 7日+(2回目) 4日、春山荷上げ(涸沢1回目) 4日+(2回目) 3日、春山偵察(前穂北尾根) 3日+(キレット) 3日、冬山偵察(五竜、不帰) 6日、冬山合宿(遠見尾根) 13日、冬季スキー合宿(梅池成城小屋) 11日、春山合宿(横尾、前穂高北尾根、吊尾根、北穂高) 20日であった。

このほかに個人山行があるので、90日から100日の山行になる。下界における計画や準備を入れると、年間180日は部活動に使っていた。

部報『針葉樹』第12号のこと

第12号は私が2年生から4年生まで、および、その後2年間の活動が対象になっている。年度でいえば、昭和30年度から昭和34年度までの5年間である。この間に、新制の山岳部の体制が確立した。昭和27年入学のオーシオン会メンバーは4年生になっていた。チーフリーダーは吉田義則さんだった。名ク

ライマーの甘利さんは卒業を延ばし、山岳部で6年を過ごした。岩登りと雪山を目指す4年では足りない。新制も旧制並みに6年欲しいというのが本音であろうか。

突出したクライマーが活動する山岳部では、チーフリーダーの責務は大きい。クライマーがチーフリーダーを兼ねると、パーティの統率がとれなくなる。名クライマー小谷部・森川さんを支えたのは、望月さんのリーダーシップだったと思う。新制初期の名クライマー甘利さんなどをサポートしたのは、チーフリーダーの石原さんと吉田さんだった。極地法という登り方は、個人の技術をフルに発揮させる集団支援体制である。大学山岳部で学んだのは個人山行ではなく、ヒマラヤ遠征を成功させる極地法の心・技・体の習得だった。これが第12号に報告されている。

このような登山思想が底に流れる山岳部に對して、ワンダーフォーゲルの空飛ぶ思想は異なる。昭和30年度の入部希望者が30名を超えながら、夏山合宿の参加者が7名になった理由は、今もって説明されていないが、ワンゲル思想との違いにありそうである。

昭和29年入学の山岳部員は、1年から4年まで通して在籍した9名、途中から入部して4年まで在籍した3名が針葉樹会員になっている。このほかの在部経験者は8名(長田操

彦、村上光義、南敬介、高島陽一、板谷昇、大庭将六、阿部謹也、二階堂信一)だった。彼らは針葉樹会員になっていない。如水会もそうだが、中途退学者を遇する術を持っていないのは、見直してもよいのではないか。

昭和33年3月で部員に二区切りがついて、安定した時代が続いたが、やがて山岳部員の遭難が多くなった。これは登山人口の減少、登山思想の変化により生じたものと思われ、「針葉樹会」に「新葉樹」が萌芽していたのではないか。

近時の登山は小グループか単独行になっている。集団行動をとるのはツーリスト登山である。歌でいえば斉唱であり、極地法は合唱である。しかし、独唱がもてはやされると、合唱は衰退する。山岳部は少人数でもできるアルピニズムに傾注しながら、探検という方向を目指すことになる。『針葉樹』第13号はこれを物語る。

想い出す山のかずかず

昭和29年7月の涸沢合宿 山で歌う

入部最初の夏合宿は、食糧調達のための先発隊7名を出した。勝田さんがリーダーで高崎さんがサブリーダー。JR高崎駅プラットフォームで中村(Y)からお米を受け取った。

上高地で奥又白隊と落合い、下又出合でテントを張る。翌日、先発隊は涸沢へ入った。合宿後入院された勝田さんはしんどそうだった。本隊が入山する前に、高崎さんと北尾根経由奥穂に登り、穂高小屋で「仕事の歌」を教わった。私にとつて新鮮な歌だった。勝田さんからは宝塚歌劇の歌という、夕日山に沈みて 黄昏迫るころ ここに我ひとり立ち 遠き君を想う……」を教わった。また、佐藤さんの絶品のヨーデルを聴かせてもらった。

ここで勝田名誉教授のご恩。私が大学院を受験したときの面接官の一人が山内進教授（西洋法制史 現・副学長）だった。私は初対面だったが、話から勝田ゼミ出身と分かった。そこで勝田さん（当時、駿河台大学教授）の話題で双方の気分が和らいだ。

### 昭和29年12月の梅池スキー合宿 山スキーの技術習得は？

1年生部員の冬合宿は、梅池の成城ヒュッテを借り切つてのスキーであった。12月18日、信濃森上駅からヒュッテまで、スキーとザックを担いで、雪道を8時間半登る。19日は、参加者21名がヒュッテ周辺の緩い斜面で練習。スキー初めての私は、最初の滑降で右膝を捻挫した。20日には捻挫がまた一人。21日は5名が沈殿した。

26日には全員が無事に下山したが、大きな荷物を担いで、林間の山道をスキーで下るのである。一度転んだら起き上がるのが大変。如何に転ばず滑るか。滑降よりも制動の技術を習得するのが、山岳部のスキー合宿の目的と思わざるを得なかった。しかし、スキーはスキー場で滑降を練習するのが早道ではないか。

### 昭和30年3月の春山合宿 スキーは登る道具と心得る

横尾若小屋前にB C（テント）、前穂高北尾根五・六のゴルにC（テント）、三・四のゴルにC（雪洞）、穂高小屋前にC（雪洞）、北穂高往復の計画だった。チーフリーダーは吉田さん。アタック隊は甘利さん、山本さん。稜線サポート隊は佐藤さん、中村（T）さん。私ら1年生4名（市畑、加地、茂木、上原）は最初の雪山で、宮川（次）さん、柴崎さんと一緒にサポート隊である。B C出発は4時半だから、食事当番の朝は大変だった。涸沢までの往復はスキーを履くが、涸沢の斜滑降の下りは等高線を往復するだけで下へ着かない。全制動回転が得意わざとなるが、スキーは登る道具だと悟る。

### 昭和30年3月の奥穂高春山合宿 自分の生存

### 力を知る

3月22日、C 建設用の食糧 燃料、器具を穂高小屋に運び、昼食後吉田さん、柴崎さんと奥穂に登った。雪はクラストしてよく締まっている。急な登りはピッケルのピッケを雪面に突き刺しアイゼンの爪でよじ登る。降りには雪面が凸状のカーブで白出谷に落ち込んでいる。滑ったら助からない。アンザイレンはしていない。この恐ろしさ。アイゼンを一歩一歩叩き込んで、唾を呑み込み必死だった。このとき、私自身がいかに生に執着しているかを知った。死を望んでいたのは、若気の至りと恥じた。それ以来、死のうなんて思わなくなつた。そうしたら、死は私を避けてくれるのだ。いま私が生きているのは、この体験のお蔭である。

### 昭和30年5月の谷川合宿 緊張感の欠如が遭難を招く

5月28日、マチガ沢出合いのテントを7時半に出て、松尾さん、市畑、茂木と一緒に東尾根へ向かった。その途中の雪渓上で私は足を滑らした。ピッケルでストツプをかけたが止まらず岩の上へ。これで駄目だと思つた瞬間にシュルンドへ吸い込まれ、暫くして背中がサバザックが雪に挟まれ体が止まった。助かった！ 幸い足場もあった。この僅かな時

間に死を実感した。死ななかったから語れるのだが、実は何も考えない、思わない、見えない、聞こえない空白の瞬間であった。死の直前は至って静かなもの。死のう、死ぬかもしれない、と思うときが怖いのである。

体が止まったとき、私はシュルンドの中から光の見える上に向かって、「ヤッホー！」と叫んだ。私の滑落を見ていた松尾さんの「大丈夫か?」の音が聞こえた。間もなくザイルが下りて来た。ザイルがなくても登れたが、ありがたく使わせてもらった。シュルンドから姿を見せた私を見て、皆さんひと安心。まるで何事もなかったように、東尾根を登り続け、肩の小屋から西黒尾根を下り、テントに戻った。14時半だった。この原因は雪渓で休憩中の気の緩みである。シュルンドが浅かったから助かったのだ。私は運がよかったとしか言いようがない。

### 昭和32年12月の槍・穂合宿 リスクの回避

12月17日、滝谷A沢のC（テント）から、中村（T）さんと北穂頂上經由滝谷C沢を下り、滝谷第三尾根に取り付いた。9時半だった。2時間でP2下に着いて、そこでアンザイレン。昼抜きでP2上へ向かう。ところが、ラストの私が右上へのトラバースに失敗し、左に振られて宙吊りになった。アイゼ

ンで岩壁を蹴って右上へ戻ろうとしても左へ振られる。同じことを再三試みた。しかし、ザイルが岩角で切れると谷へ墜落するので、30メートル程下に見えるテラスまでザイルを緩めてもらうことにした。

トップのT中さんには私の姿は見えないが、私の言う通りにザイルを緩める。だが、ザイルが足りそうもないので、ザイルを固定し私の見える所まで下りてきて下を覗く。これなら何とか足りると判断し、ザイルを緩めた。私がテラスに立ち、ザイルの動きが止まったとき、残り2、3メートルだったという。標準のザイルは30メートルだが、このときは40メートルを持ってきていた。なんと幸運なことが。

ところが、テラスから右へバンドを伝ってメインリッジに戻るとき、足が震えて前へ出ない。ようやく戻ったら、T中さんは登り直そうと言う。とてもその気力がないので勘弁してもらった。とはいえ、往路の岩稜を下り、風雪になった夕闇のC沢左股をラッセルして登るのは苦労だった。雪崩も恐ろしい。ようやく北穂の頂上に着いたのは19時。トラブルにより昼食抜いての6時間の遅れである。Cに帰着したのは20時であり、そのあと4日間、風雪のため停滞を強いられた。南岳のCおよび肩の小屋のBHとは音信不通だった

から、遭難していても連絡できなかっただろう。私はいつも運よく助かっている。『針葉樹』12号37頁の補足

この合宿で、慶応大学のパーティが蒲田から槍經由穂高をアタックしていた。この年は天候に恵まれず成功しなかったため、翌年に捲土重来を試み、尾根上の雪洞が雪崩に流され、当部の城戸さん（昭和34年卒、故人）の高校同級生が遭難死した。私と同じ会社に就職が決まっていたらしい。入社しておれば、会社の山岳部と一緒に登っていただろう。まさに一期一会である。

## キリマンジャロ紀行 その二

佐藤恭・中川滋夫・遠藤晶土・  
蛭川隆夫・小野肇・小島和人

(2008年10月のキリマンジャロ山行、会報114号に続く報告となります。編集部)

### 回想・キリマンジャロ

中川 滋夫(昭36年卒)

キリマンジャロで思い出すのは、映画「キリマンジャロの雪」の主役女優エヴァ・ガードナーの艶姿である。遠くを見つめる切れ長の目、蠱惑的な微笑を浮かべる口もと、長い手足の所作の美しさ、「こんな女性が世の中にいるのか！」と彼女の魅力に圧倒されてしまった若き日の事を思い出す。

後年、映画談義で、「日本で彼女に似ている女優は誰か」が話題になった時、ある人は東映ヤクザ映画の女壺振り役の江波杏子と言いい、ある人はフランメンコ・ダンサー役で花を口に啜えた松坂慶子だと言つ。いずれも一面を捉えてはいるが、エヴァ・ガードナーがかもしだすトータルな魅力、敢えて言うならば雰囲気が違うなどと言いつたものだった。

最近「キリマンジャロの雪」のDVDを観た。ヘミングウェイの記者・作家としての自由奔放な生きかた 狩猟・フィッシング・従軍志願 それにともなう愛の遍歴、まさに彼の生涯の一部を切り取った如き映画に、端で観ていた家人は、「男はロマン、女は安定よね」とつぶやいた。

ヘミングウェイが小説の構想を練ったといわれるケニアのアンボセリに、登頂後一泊した。朝方、南東方向にどつしりとした巨大な台形のキリマンジャロが見えてきた。その全く同じ景色が映画の中に出てきた時、小説と映画のオーバーラップに、その場所に立てた実感が加わり、何か不思議な気分になった。

キリマンジャロのいくつかの登山ルートの中で我々が採ったルートは東面からの登り口、マラング・ルートで、別名コカコーラ・ルートと呼ばれている。登山道が整備されていること、途中、三個所の山小屋があるのでその様に呼ばれているらしい。どのルートにせよ、ガイドなしには登れないことになっており、ガイドは、パーティーの人数、ルートに応じて、アシスタント・ガイド、コック、ポーター等を手配、指揮する。我々の場合、ガイドに、アシスタント・ガイド3名、コック1名、ウエイター2名、ポーター12名、合計19名のサポーター部隊であった。

印象的なのは、ガイドは英語がよくできコミュニケーションは全く問題なかったのと、彼等の身体能力の高さには驚かされた。登頂日、4700mのキボ・ハットを真夜中に出発し2ピッチで、Sさんが高山病で調子悪く引き返すことになり、アシスタント・ガイドのM君と共に下りた。M君はキボ・ハットまで戻り、踵を返して再び我々に追いつくまで、別れてから1時間強、あまりの速さに正直びっくりした。まさに韋駄天である。

彼等の強さ、速さはこの正月の大学箱根駅伝でも痛感した。花の2区、山梨学院大のモグス、昨年自分が出した区間新記録を更新し2年連続区間新、同じ2区で20人抜きの大記録を出した日大のダニエル、共にケニア出身だが、彼等高地民族のスピード・馬力は規格外、モノの違いを見せつけられた。オバマ新大統領の父親もケニア人とのことだが、2年間にわたる予備選・本戦を勝ち抜き、かつての政敵ヒラリーを取りこんだ新聞僚人事といい、何か期待をいだかせるバラク・オバマにエールを送りたくなつた。

我々のルートで考えられるリスクは、突然の大噴火・落雷・落石(これはたまにある)ぐらいで、低地民族で地球温暖化に慣れ切つた我々にとつての問題は、高度順化と低温下での登山といえる。最短距離の南面ルート、



距離のある西面ルートからは、少なくなつたとはいえアイス・フィールドが残つており、特に西面ルートでは頂上附近で豹の屍に出合えるかも知れない。

14日に登山を終えた6人は身体休めも兼ねて4泊5日のサファリの旅に出ました。目的地は特に有名になつた場所を避け、玄人好みのサファリです。(編集部)

## サファリ報告

遠藤 晶土(昭37年卒)

10月15日 アリユーシャ經由タランギーレへ。

8時30分、モシ養。9時30分、10時00分アリユーシャの観光会社。13時、タランギーレソパロツジ着。チエックイン後ゲームドライブ

モシ郊外の気分の良いホテルをチエックアウトしてアリユーシャへ。そこで、サファリ用の小型バスに荷物を積み替える。銘々の沢

山の荷物を屋根に積み上げ、積み切れぬ分は車内に詰め込んで、それでも我々の席はどうにか確保して、小型バスはタランギーレへ。人家が途絶える。人の気配はマサイ画とビーズ細工を売る小屋がポツポツとあるのみとなつて、タランギーレのゲート着。

点在する巨大なバオバブの樹皮が削られている。増えすぎた象の仕業だと、今回の運転手兼ガイドのジョン君の説明だ。一度、ロツジにチエックインをして、また、改めてゲームドライブ。サファリとはスワヒリ語で「旅」、「ゲーム」は「獲物」の由。1936年に発表されたヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』では、主人公はまだ狩をし、テント暮らしだ。20世紀の *the quarter* に今の状態になつた由。

10月16日 タランギーレからナトロン湖へ。  
8時出。11時40分 MONDUR DISTRICT  
14時 ナトロン湖

ナトロン湖へは時間がかつた。大地溝の延長と思われる谷底へ下りていくかと思えばまた車は喘ぎながら登り返す。大きな上り下りがないところでモガタガタ道で若いジョンでも頻繁なギアチェンジに腕がパンパンになると、「トイレ」と一人が要求する。加齢に加

え、現役の前立腺ガン患者を二人も抱えているパーティーだから当然だ。ジョンも心得ていて道を外れ小山に。この山は OLDONKO LENGAN(MT. OF GOD)で、噴火口は SHIMO LA MUGU(HOLE OF GOD)。マサイが生贄を捧げて祈る神の山だと。やー、初めて現地の神に会つた。神様大好き人間は私だけではない。ジョンにスペルも書いてもらつて大感激。

さて、下を見ると高さ50センチ程の小型の鳥居がある！ 時間・空間を超えて鳥居の原型をここで発見するとは！ 神様大好き人間は大興奮でカメラに収める。道が落ち着いた頃「ジョン君、あれは、なんだ？」「あー、あれはあの娘達の売り物のビーズ腕輪を飾つておく台だよ。呆気ない結末でした。

突然、立派なロツジが並ぶナトロン湖のキャンプに着く。こんな地の果てにも白人は先ずファンダメンタルを整えるのか。しかも白人のグループの客がいる。感心の一言だ。遅い昼食後、NとEを置いて、4人は近所の沢登り。ザワメキ落ちる立派な沢を腰まで水に浸かつて遡上している気持ちよさそうな写真数枚を後で見せてもらった。4人の帰着を待つて今度は全員でナトロン湖へフラミング見物に。夕闇迫る湖で遠目に無数のフラミングの群れを見て帰る。



マサイ族の村で村人と記念撮影（有料です）。

10月17日 アリユーシャへ  
8時40分 12時、レストランで昼食。  
15時、ショッピング 16時、ホテル

ナトロン湖は秘境だ。往復に時間がかかり、行く人は時間と金を浪費する。だからこそ秘境なのだ。昼食は久しぶりにランチボックスでなく国道から一歩入った林の中のレストラ

ンで気分良く。そして、アリユーシャの街中へ。我々の希望通り、土産店でない、地元の人が買物をする店で土産物を買う。コーヒー専門店では好みの味のコーヒー豆を好みの分量、好みの細かさにもらう。隣の大きなスーパーマーケットでは、缶入り紅茶、コーヒー、塩を買い込む。忽ち棚は空っぽになり、一同満足してホテルへ。夕食後Sが傷薬の名目で担いでいたウオッカを開けて「反省会」。反省より、次回のターゲットで盛り上がった。

10月18日 アリユーシャから国境を越えアンボセリへ

7時40分出。9時40分、10時40分国境。ジョンと別れケニヤ側のバスに乗り換え。12時アンボセリ入り口。13時ロツジ着。14～18時ゲームドライブ

朝、少し雨が降る。この時期アフリカでは当たり前かもしれないが今回は天気恵まれた。今朝の雨で埃が多少おさまった。

アンボセリはヘミングウェイが『キリマンジャロの雪』の構想を得た場所だ。今日はお目当てのキリマンジャロはうつつすらとしか見えなかったが。

サファリではいろいろな動物を見た。中で印象に残る数々。象が車道を動かず我々も彼

（だと思いが）が動くまで5分以上も静かな時を過した。ライオンが二頭で一頭のイボイノシシを追いかけたが、お互い打ち合わせがないので取り逃がした。ライオンが5頭で盛大に獲物を食べているところ。ライオンは矢張りスターだ。

ハイエナは大きく貴禄がある。しかも自分で獲物を獲るのだ。ジャツカルは往年の名著『ジャツカルの日』からの私のイメージと異なり、貧相でハイエナの余り物にありつく小動物なこと。インバラのオスは一頭がメスを独り占めして残りのオスは、バチエラー組（ジョンの言葉）を作って所在無くブラブラしていること。（このバチエラー組には方々で出会って、その度に我が身を鑑みこちらもしょんぼりしたものだ）。

マサイ部落見学ツアーもして、ロツジ。今夜もウオッカ・パーティー。

10月19日 7時30分出。13時40分空港  
16時40分、定刻どおり帰国の便発。

帰途の臨席は大きな黒人。えらく人懐っこくしきりに話しかけてくる。こちらも予ての疑問を投げかける。「何故あんなに沢山いるシマウマを食べないのか？」彼は淀みなく答える。「習慣の違いです。日本人が猫を食べな

いと同じです」成る程な。

彼は国際会議に出席のため日本へ行く途中だという。他のメンバーは先に行ったが彼は風邪のため遅れたのだという。オイオイ、冗談じゃないよ。うつされたら大変だ。帰国後は忙しいのだ。あらゆるスケジュールをこの山行の為に延ばしているのだ。それに、帰国後倒れたら、キリマンジャロに登れた体力はなんだったかと他人に後指を指される。彼には申し訳ないけれど後は眠ったふり。話をしないことにして、乗換えの空港であつちの隅で一人ポツネンとしている彼も無視して無事帰国しました。あーあ、これから、忙しい。

### 費用や準備

小島 和人(昭40年卒)

キリマンジャロから帰って7ヶ月、いまだにあの時の高地歩行の感覚に痺れていて次の目標が決まっていない状況ですが、キリマンジャロの話を知人すると殆ど同じ質問に出くわします。ご参考に報告させていただきます。

### 費用

一体いくら掛かったのかとよく訊かれます。古くなって買い換えたシラフとか高所で

の冬用下着などの購入費、検査や予防の医療費、長者ヶ岳・障子が岳・富士山など準備登山、そして三浦ベースキャンプでの低酸素トレーニング代、帰りの土産代等を除いて、羽田を出て羽田に帰るまでに掛かった費用は一人当たり55万円+100米ドルで少々お釣りがありました。蛭川幹事の、調べて比べての御努力の賜物でこれだけで済みました。

内訳を御説明しましょう。ナイロビ往復航空運賃(エコノミー、含むサージャージ)18万6千円、現地旅行会社(現地宿泊、食事、車、山行ガイド&サポーター等現地での全ての費用)29万5千円(2677米ドル)が大きな費用。それ以外にヒザ取得代2万8千円、公物薬品・食料7千円、現地への土産代5千円、登山中のガイドチップ1万7千円(160米ドル)、ホテル・ドライバのチップ、公物飲料水代など1万3千円。それに下山後キリマンジャロビール・南ア産ワインなど毎夜美味しく頂きましたが、一人当たり5晩で約1万円と大変お安く済みました。出発直前の円高も神風でした。

皆さん興味があると思われるのはガイドへのチップだと思います。それぞれ一日あたり米ドルで、ガイド15ドル、アシスタントガイド・コック10ドル、ウェイター8ドル、ポーター7ドル。これ以外に全工程での指導力に

対しガイドに30ドルの特別チップを加えました。これは現地旅行会社の情報をベースにガイドとの交渉で決まりました。総勢19名のサポーター部隊の人数も各チップの金額もガイドとの話し合いで決めました。それから登頂の日、強力な支援をしてくれたガイド、アシスタントガイドに対して各自それぞれの気持ちでポケットマネーを渡していました。中川リーダーの回想にもあるようにガイド、アシスタントガイドは遅しく真面目で登頂の日は実に良くサポーターしてくれました。

### 準備

次によく訊かれたのが「あまり山に行っていないお前が何故5700mまで登れたのか？」

私は「ロマン溢れるキリマンジャロに行ってみたかった。それで仲間に迷惑のからぬ様、それなりの準備をした。氷雪技術など要らない安心な山だが、高所低酸素は危険もある、頂上まで行けなくとも出来るだけ近くまで行きたいと思って行ったら、運よく行けたのだよ」と答えています。これから高齢者になって再び山に行ってみたいという私のような会員もおられると思うので私の準備を簡単に話します。

まず体力です。前々年ニペソツ山、前年利

尻富士に針葉樹会員に連れて行ってもらっていて、一日10〜12時間歩く経験はしていましたが、キリマンジャロはその前に3日間1000m連続して登る必要があります。それで10kgぐらいの荷を背負って一日5〜6時間、5日ほど連続して歩く訓練を、横浜郊外でしました。辺鄙なところに住んで家の周りには坂がいつぱいで幸いでした。75歳までは筋肉強化が可能な佐藤さんのアドバイスを信じて歩きましたが、隣人達は何してんだろーと不思議に思っていた事でしょう。

次が健康対策。一年前の眼底出血では通院中。若い時から胃腸が弱く、最近では胃酸が逆流して咽の奥に炎症ができ、咳が出る食道ヘルニア。首の後ろの筋肉に小さな石灰のようなものが溜まっていて頭痛を起こす筋肉疲労。加えて三浦ベースキャンプで低酸素睡眠訓練中に発見された睡眠時無呼吸症候群。いずれも高山病とすぐ仲良しになりそうな欠陥だらけ。蛭川さんが前号で紹介している松野医師以外にありったけの知り合いの医師に相談して徹底的に対応しました。自分の健康に自信を持ち出発したかったです。一ヶ月前から登頂の日までは5種類位の薬を飲み続け体調をベストに持っていくよう備えました。

そして高所低酸素対応。基本的には、体調を整える、体力をつける、低酸素に慣れる、

の3点と理解していましたので上記の準備に加えて、蛭川さんが前号で紹介している、富士登山と頂上泊、三浦ベースキャンプでの2泊とトレーニング3回。いずれも効果絶大でした。そして登山の初日からダイアモックスを毎朝一錠、登頂の日は二錠、松野医師の教えを忠実に守りました。

登頂直前の仮眠時間、一睡もできず2回寒い中で神経性のトイレに行きました。月明かりの中で頂上の方を見ながら、「登頂の日は眠れなくても気にしないで。父も眠れなかったのだから」との三浦豪太さんの言葉を思い出していました。そして好体調に恵まれ、初体験の高所・暗さ・寒さの緊張感と戦いながらギルマンズポイントに立てました。

## 中高年のための

### 北海道のおすすめ山スキー 20選

小野 肇（昭40年卒）

北海道に移り住んではや44年（そのうち7年ほど東京勤務だったが）。雪のある札幌は、

冬から春までをいかに快適に過ごすかで充実した豊かな人生になるかどうかが決まる。ピークをめざすのを目標とせず新雪の適度な斜面をさがし滑ることが積雪期の最高の過ごし方である。札幌を起点とした中高年向きのおすすめ山スキーコースを紹介してみたい。

札幌市の山

1 手稲山ていねやま（1023m）ネオパラコース（838m）

手稲山の東隣、標高838mのネオパラのピークをめざす（私の家からスキーにシールをつけて登れる。わたしのメールアドレスもこのテイネネオパラを借用している）。手稲山に北大のパラダイスヒュッテという山小屋があり、その周辺をパラダイス斜面と呼んでいたそう、この斜面のコースをネオ、新しい、パラダイスと命名したようだ（ただし北大の小屋とネオパラのピークは離れている）。林間コースを登ると頂上までに3つの快適な斜面がある。林間コースも昔は樹木が小さかったが40年も経つと太くなっている。今ではなんとか技術力で滑り下りている。

2 百松沢山ひゃくしょうざき（1038m）シルバーザッテル（765m）

	スキーコース	標高	登り時間	難易度	アクセス	おすすめ宿泊/温泉
1	手稲山 ネオバラコース	838m	3時間	B	地下鉄「琴似」駅からバス	アートホテルズ札幌(南9条、西2丁目)
2	百松沢山 シルバーザツテル	765m	2時間	A	同上	同上
3	迷沢山 送電線コース	910m	3時間	B	同上	同上
4	無意根山 千尺高地	1153m	2時間半	A	定山溪温泉からタクシー	定山溪温泉
5	札幌岳	1299m	4時間	C	同上	同上
6	小喜茂別岳	970m	3時間	B	同上	同上
7	春雪山	906m	3時間	B	JR「札幌」駅からバス	朝里川温泉
8	塩谷丸山	629m	2時間	A	JR「塩谷」駅	同上
9	余市岳	1488m	2時間	B	札幌/小樽→キロススキー場(バス便あり)	キロロリゾート ホテルピアノ
10	漁岳	1318m	4時間半	C	マイカー	支笏湖 丸駒温泉旅館
11	ワイスホルン	1045m	1時間	A	JR「倶知安」駅からタクシー	くっちゃん温泉 ホテルようてい
12	チセヌプリ	1134m	1時間半	A	JR「ニセコ」駅からタクシー	ニセコ湯本温泉 国民宿舎 雷秩父
13	シャクナゲ岳	1074m	2時間半	B	同上	同上
14	ニトヌプリ	1080m	2時間半	B	同上	ニセコ五色温泉旅館
15	ニセコアヌプリ	1308m	2時間半	B	同上	同上
16	目国内岳	1202m	3時間半	B	JR「蘭越」駅からタクシー	ニセコ新見温泉 ホテル新見本館
17	岩内岳	1086m	4時間	C	札幌→岩内(バス便あり)	岩内温泉 いわない高原ホテル
18	黒岳	1984m	3時間	B	層雲峡	層雲峡温泉
19	三段山	1748m	3時間	C	JR「上富良野」駅からバス	十勝岳温泉 白銀荘
20	手トカニウシ山	1445m	3時間	C	マイカー	白滝温泉ホテル

難易度はA(初級)、B(中級)、C(上級)。登り時間は目安。アクセスは一例です。

百松沢山の頂上はシルバーザツテルからアップダウンがあり、頂上直下を除けばスキー滑降に苦労するのでシルバーザツテルま

がおすすぬ。どうして昔の人がシルバーザツテルと命名したかさだかではない。銀の鞍と訳すのだろうか……。しゃれた名前である。札幌が一望できる広い斜面が広がっている。昔の人は一日かけてここまで来てテントを張って札幌の夜景をながめ酒をくみかわしていたという。翌日頂上をめざしたそつだ……。ネオバラと同じクラシックルート。

3 迷沢山(まよひのやま)(1005m) 送電線コース(910m)

電力マンはこの山を送電山とよんでいる。送電線が頂上近くまで敷設されている。送電線を樹木から守るため許可をとって樹木を伐採している。したがって冬はすばらしい斜面を提供してくれる。迷沢山とは地図がいまだ不正確だったころ沢がいりくみ頂上を目指すには迷つことが多かったのでこの名前がついた。送電線の上は尾根上だが頂上まで樹木が多く狭いアップダウンがあるので面白くない。頂上はふまず広々とした斜面を滑り終える。

4 無意根山(むいねやま)(1464m) 千尺高地(1153m)

頂上までは距離もあり、なだらかがクラストした斜面が続き、雪庇もできやすいので避けたい。千尺高地までがおすすぬ。天気は

いいときは無意根山の手前にある長尾山(1211m)をめざしてもいい。千尺高地は深雪の斜面がありシールをザツクにしのはせて何度も登っては滑れる楽しいところ。昔は登山口までバスが運んでくれたクラシックコースだった。

5 札幌岳(さっぽろだけ)(1299m)

札幌を代表する山。樹氷のきれいな山。標高810mあたりに冷水小屋(地元の私立大雪山岳部が運営)があり冬季も泊まれる。ここで1泊して頂上をめざすのも楽しい。小屋までは夏道沿いに進むので迷つことはないが、そこから上は夏道と違う沢沿い進む。頂上直下の大斜面が魅力。雪質に注意して雪崩をおこさないように登る。天気が悪い時はコース旗を活用し沢の状況をみながら旗に忠実に下ること(沢が口をあけることあり)。

札幌近郊の山

6 小喜茂別岳(こきもべつだけ)(970m)

通称ボンキモ。夏道がないため冬しか登れない。標高680mから頂上までは広い雪原があり思い思いのシュプールが……。天気が悪い時はコース旗持参のこと。親にあたる喜茂別岳、無意根岳、目を転じれば羊蹄山、二

セコ連峰が一望。

7 春香山(906m)

頂上直下に山小屋銀嶺荘がある。冬でも管理人が常駐する小屋は北海道ではめずらしいので、ぜひ利用したい。ここから頂上まで標高差200mの大斜面が魅力。1泊して何度も登り返して滑る人が多い。夏道沿いにいくので迷う心配もない。林間に赤テープが巻かれている。

8 塩谷丸山(629m)

小樽より西側の山。広々とした頂上直下の標高差170mほどの雪原がパウダースノウ。樹木がないため天気が悪い時はコース旗持参のこと。日本海、小樽、積丹と見飽きない。コースは夏道と違うが、天気がよい時は問題ない。

9 余市岳(1488m)

キロロススキー場のゴンドラを利用できる。あとは頂上まで標高差300m。通称飛行場といわれている平坦なところをのどかに1時間ばかり歩く。そこからいったん下り、コルにつき頂上を目指す。頂上直下はちよつと急。天気が良い時はスキー場を一望。思い思いのシユプールを描きコルまで滑る。視界不良の

時はワンデリングしやすいので思い切って中止しよう。過去にも事故が多く発生しているので……。

10 漁岳(1318m)

冬しか登れない。マイカーで札幌から支笏湖方面へ。オコタンペ湖の分岐に車を置いて歩き出す。だからした平坦な林道を歩き、標高780mあたりから登る。恵庭岳、支笏湖、オコタンペ湖と景色は抜群。頂上直下は急な斜面なのでクラストしているときは慎重に。

二セコ

11 ワイスホルン(1045m)

ワイスホルンスキー場の上部から登る。リフトが休止されていて代わりに雪上車がゲレンデ上部まで運んでくれる北海道でも珍しいスキー場。ゲレンデは圧雪されておらず、新雪のまま……。広々としたゆるやかな斜面を自由に滑れる。頂上をめざす場合は、雪上車をおりてから尾根上を小1時間歩く。二セコ連峰、羊蹄山が一望できる景観抜群の山。頂上の右側(下りのときは左側)に雪庇があるので注意。二セコには珍しいヨーロッパ的な山名である。

12 チセヌブリ(1134m)

二セコ湯本温泉の蘭越町営チセヌブリススキー場のリフトを使う。二セコではひなびたスキー場。標高830mの地点からシルを付ける。高度を稼ぐと樹木のない一面の銀世界。全山どこでも滑れそう。したがって天候不良の時はコース旗持参。二セコ全山と羊蹄山がきれいにみえるクラシックコース。ふもとの国民宿舎雪秩父は露天風呂が6つもある。この風呂に入るだけでも幸福感いっぱい……。

13 シャクナゲ岳(1074m)

チセヌブリの隣の山。ぼこんとんがっている。こもチセヌブリススキー場のリフトを使う。なだらかな雪面をのんびり歩く。ピーナスの丘を右に見て頂上をめざす。ピーナスの丘とはじゃれた名前である。おもわせぶりななだらかな丘陵である。誰が命名したのでろう……。こも天気が悪い時は迷いやすい。コース旗持参のこと。

14 ニトヌブリ(1080m)

二セコ五色温泉までは冬でも車が入れるようになつたので山スキー愛好者がふえた。五色温泉裏手の尾根をとりつく。下りは五色温泉めがけて沢筋を選ぶ。登りきるとイワオヌ

ブリ、小イワオヌブリを右に見ながらおっぱいのような双耳峰をめざす。なだらかな斜面もあるので吹雪かれたらコース旗持参。

15 ニセコアンヌブリ(1308m)

ニセコの主峰アンヌブリは周辺をゲレンデに囲まれている。そのリフトを使うと小1時間で頂上に着く。今回紹介するのは五色温泉から西尾根を登り北壁を滑るコース。山スキーの醍醐味が待っている。頂上から北壁を滑りすぎないように……。通称ちんぼこ岩をめざして左にトラバースして五色温泉までおりる。滑りすぎると平坦な道路にぶつかり歩きになってしまう。頂上から日本海が見える。積雪状況によっては雪崩に注意。

16 目国内岳(1202m)

ニセコの秘境、混浴の露天風呂のある新見温泉に宿を求める。ここから夏は車が通っている道を新見峠に向けてシールで足慣らし。途中から左の沢を渡渉する。スノウブリッジを十分確認して渡る。沢を右に見て尾根筋を登る。目国内岳の広大な斜面が見えたらしめたもの。どこから登ってもよい。ただ下りのことを考えて目標となるコース旗をとどこどころ挿すと安心である。ピーク手前でスキーをデポして両手を使ってとんがった頂上をめ

ざすと景色は抜群(ピッケルは不要)。下りはパウダーが待っている。

17 岩内岳(1086m)

岩内のスキー場はリフトが運休しているのだからシールをつけないと登れなくなってしまう。上部のゲレンデは傾斜がやや急でジグを切って(ジグザグに)登る。ゲレンデの上からは小1時間で頂上へ。頂上直下はクラストしている。ここを注意さえすればあとは圧雪されてないゲレンデを滑る。登りに時間がかかるので体力勝負か。

ちょっと遠出

18 黒岳(1984m)

大雪山の一つ。層雲峡からコンドラ、リフトを乗り継いで7合目へ。夏道沿いに登る。あまり左に行かないこと。左にまねき岩がみえてくるがまねかれないように。くだりもまねき岩に近づかぬように。右にコースをとると悪天候のときはリフト乗り場を見失うし、雪崩にあう危険性もあるので……。素晴らしい深雪が待っている。頂上からは雪に抱かれた大雪山連峰が一望できる。感激の一瞬である。

19 三段山(1748m)

十勝連峰の前山。パウダースノウが待っている。その名の通り3つの斜面があり3回スキーが楽しめる。ふもとの温泉は大きな露天風呂がすばらしい。クラシクルートでファンが多い。

20 チトカニウシ山(1445m)

夏道のない積雪期だけの山。秘境ともいえる。北見峠(860m)に車を置いてシールをつける。近年札幌から高速道路がのびたので近くなった。昔は夜行のJRに乗って登山したようだが、今では最寄り駅が廃止になり、車でしか行けない。クラシクルート。雪庇に注意して登る。雪質が一定でない時もあるの、下りるときのために登るときに確認の事。天気がいいときには標高差500mの新雪滑降が期待できる。

下記URLにて紹介した山の位置をご確認いただけます(針葉樹会HPからもアクセス可能)

<http://maps.google.co.jp/maps/ms?ie=UTF8&hl=j&msa=0&msid=113972018284983541921.00046a185c18d4f74ca4a8z-9>

## アジア往復旅行1年2ヶ月

「よくある質問」

田形 祐樹（平6年卒）

私は、2006年10月から2007年12月にかけて、日本からトルコ・イスタンブールを往復する形で、ユーラシア・アジア20カ国を旅した。今回は、その最終回で、よく質問された事柄について答える形にして総括したい。

「危険な目には遭わなかった？」

答えは「ない。アゼルバイジャンの件を除くと。」

直接的な肉体的危害を加えられたことは、一度もない。その、アゼルバイジャンで拘束されたときでさえ、警官にこづかれたくらいである（本稿第1回）。

世界各地を旅行しているバックパッカーと話していると、アジアは比較的安全だということに気付く（ただし、アフガニスタン、イラクは除くべきだろう）。イスラム教徒といっ

ても、決して皆がイスラム過激派ではないのだ。当たり前のことだが、日本においては新聞、テレビのイメージが先行してしまう。私は、イランで長距離バスに乗っている時に、イラン人青年から「私がテロリストに見えますか？」と質問されてしまった。東南アジアでは、仏教国が多く、穏やかな人が多かった。また、私は、モノを盗まれたこともない。

もつとも、私も全くの無警戒だったわけではない。「夜遅く、出歩かない」「危険情報について、ガイドブック、旅行者及び地元の人から入手する」「お金をもっていそうな格好をしない」などの基本は守っていた。もつとも、私は、自然と、お金をもつてなさそうな風体にはなっていたのだが……。

危険な目には遭わなかったのだが、騙されることは多かった。騙されることを、バックパッカーの間では「ぼられる」という。「ぼられ度」は、ベトナム、インドが高かった。

インドでは、デリーで旅行者がよく騙される。現地インド人でさえ「俺たちだって、デリーに行けば、デリーの奴らに騙されるんだから」と言われた。うぶな日本人なら、簡単に騙されるだろう。インドでは、私も警戒していたため、大きく騙されることはなかった。私が、一番悔しい思いをしたのは、ベトナム。1台しかないタクシーと交渉するしか

い場面。タクシーでは「先にお金を払わない」のが鉄則だ。しかし、「先に払わないと発車しない」と言われて、仕方なく、先に払った。ところが、タクシーは目的地に着く前に停まった。「目的地まで行くのなら、もつと金を払え」というのである。その場所は、どこだか検討もつかないところ。こんなところで下るされては、途方に暮れてしまう。その時、私は、セルビア人女性と同行していて、彼女は金を払っても、目的地に行きたいと言う。私一人なら、なんとか粘ったり、交渉決裂他の手段で移動したりも構わなかったのだが……。それは乗り合いタクシーで、後から地元民が支払っている金額を横目でみていると、我々は地元民の10倍くらいを払わされていた。

次に病気について。病院に行ったのは、チベットで高山病に罹ったとき、カンボジアでバイクでこけたとき（本稿第1回）、そしてタイで靴ずれを放っておいて化膿したときだけである。入院まではしたことはない。インドに入る前は、腹痛をおこすことはなかった。我ながら強靱な胃腸だと思っていたところ、インドではそうはいかなかった。2回ほど下痢+発熱に見舞われた。さすがインド！である。日本から持ってきた下痢止めは効かない。抗生物質が必要だった。下痢といって



細菌性の下痢なのだ。それを飲むと、びたりと下痢が止まったのだから、抗生物質は偉大だ！ と思った次第。インドの後は免疫ができたのか、ひどい下痢、腹痛は起きなかった。

「どの国が一番よかった？ 悪かった？」

一番よかった国は「イラン」。

もっとも、この種の質問は答えるのが、なかなか難しい。どの国にも、よい点、悪い点があるからだ。それでも答えるとしたら、まず、よかった国はイランになる。とにかく親切にもらうことが多かった。他に、パキスタン、バングラデシュでも親切にもらうことが多かった。イスラムの国が多い。

悪かった国をあげるとしたら「アゼルバイジャン」。

やはり警察で不当に拘束されたことは強いトラウマとなっている（本稿第1回）。他にもアゼルバイジャンでは、警官でもない男からいきなり「パスポートを見せろ」と言われたり、列車の車掌から「いちゃもんをつけられたりとか、いい印象がない。

旧ソ連圏の人々は、なんとなく陰を持っている印象があった。アゼルバイジャンでの拘束劇を経験してから、旧ソ連圏では警官恐怖症になってしまった。ガイドブックなどにも旧ソ連圏には不良警官がいて、所持品検査と



こんな格好で旅をしていました（田形は左端）。長旅には、速乾性ジャージ等が一番です。ジーンズは、乾きにくいし、湿気を含んで重くなるし、不向きです。暑くて汗がすこいので、頭にタオルを巻いています。ミヤンマーで買ったパツクも持っています（パキスタン・ラホールにて）。

称して旅行者の財布から金を抜き取ることもあるという。私も警官が近くにいないか、あたりをきよるきよる見回したり、警官が前から歩いてきたら脇道に避難したり、眼鏡をはずしたり（眼鏡をかけているアジア人の多くは日本人とわかる。日本人だと金をもつてい

ると不良警官に目をつけられやすい」と、かえって怪しい？行動をして、対処せざるを得なかった。警官恐怖症は日本に帰ってきても治っていない。警官の制服を見ると身構えてしまうのだ。

「何が一番うれしかった？ 苦労した？」

一番うれしかったことは、「これ一つとは決められない」。親切にもらったこと、すべてだ。疲れ果てて途方に暮れて道に迷っていたときに、親切に道案内してもらったことは非常に多く、身にしみてうれしかった。

一番苦労したことは「インド、パキスタンの暑さ」だ。

5月中旬から6月末にかけて、インド北部（パキスタンを旅したが、この地域で一番暑い時期で、まさに地獄のような暑さだった。私が滞在したとき、パキスタンのラホールでは47度まで上がり、日中の路上は、まさにフライパンの上に乗っているかのようだった。翌日の新聞を見ると、その暑さで少なくない人が死んだとのことだった。

私は、ケチってクーラーがない安宿に泊まっていた。今から考えると、日本円でプラス500円くらい払えば、クーラー付き部屋に泊まれたのだろうが、その時はとにかく長期旅行だから節約しようとしていた。

昼間の熱射のせいで、夜になって宿の建物は熱をもっている。天井では扇風機が回っている。そのままでは熱い風が体にあたるだけで、全く涼しくない。そこで私は、水シャワーを浴びて、そのまま水をふかずに銀マットを敷いたベッドに横たわると、水が蒸発して、気化熱でいくぶん涼しく感じられるという手法を編み出した。かなり楽になる。もっとも、すぐに水が気化してしまい、またシャワーを浴びることに……。そしてベッドへの繰り返しだ。

この方法も、扇風機が回らないと使えない。時々停電が起きるのである。こうなるとどうしようもない。屋上に出て、空の下で寝た。

あまりに日中は暑いので、宿にいられない。そこで、近くにあるケンタッキーフライドチキンに行って涼むことに……。しかし、このようなファーストフード屋はパキスタンでは高級店であり、値段が高い。何も注文せずに長居することもできないので、あれこれ注文すると、宿代以上になってしまった。

鉄道やバスでは、窓を開けて風を入れることは逆効果になる。風が来ても涼しくはない。なぜなら風は熱風だからだ。

イラン滞在時には、ちょうどラマザン（イスラム教の断食月）にあたった。日中は食事はおろか、水分も取ることができない。イラ

ンは、この点は厳格だ。私は外国人であり、ムスリムではない。しかし、そういうしきたりの国に来ているのだから、できるだけ従おうとした。

よく、「一番暑い時期のインドに行くな」とか、「ラマザンの時期のイランに行くな」とか、旅行者の間では言われている。

しかし、私にとってはこのように苦労したことは、今となってはいい思い出である。インド、パキスタンの本場の暑さを経験できた。そして、イランでは現地の人と同じように、ラマザン中は日中は腹ペコだった。そして、ラマザン明けは苦労をともしたということとで、一緒になって現地の人と喜んだ。

その地域の風土・習慣を庶民と同じように経験できた。クーラーの効いた一流ホテルで美味しいものを食べていれば、できない経験だ。

「旅の前後で、自分が変わった？」

「はい。少し変わった。以前より少し気長になった。」

基本的に日本ですっと生活してきた身にとっては、日本の思考が身にしみている。確かに、私は大学時代にアメリカに留学していた。しかし、わずか10ヶ月、それも大学の敷地にいることが多かった。

今回は、さまざまな国と地域で多くの異なる身分、社会階層の人たちと接することができた。そこでは、日本的思考からすると、非効率的なことと不合理なことも多かった。しかし、そこで力リ力リしても仕方なかった。

「そういう考えもあるのだなあ」「そういうやり方もあるのだなあ」と、少し気長に考えることができるようになっていった。「まあ、最後には何とかなるでしょう」と考えられるようになった。もっとも、日本社会で生きていくのは、常にこのような姿勢でいると、不都合なことも多いのだが。

イスラム圏を旅行していると、よく「インシャラー」という言葉を聞いた。これは「パスは、明日、出発するのか？」と聞いて、「インシャラー」と言われれば、「多分ね。でも、神のみぞ知る」というようなニュアンスで、ネガティブに捉えられている。しかし、何事も力チツと固定できるだろうか。未来は変わりゆくもの、不確定なものだろう。あらゆるものが、あらかじめキツチリ決められている社会は、少しおかしくないだろうか。

片倉もと子「イスラムの日常世界」には、「人間は変わる、移ろつ者である」という意識『全く変わらない』ということに価値をおかない」という趣旨のことが書かれている。

私は、ここで、イスラムの教えが素晴らし

## 二月会通信

平成21年2月16日

【出席者】 石井 山崎 佐雑 中川 三井  
遠藤 高橋 蛭川 竹中 小島 高崎(俊)  
佐藤(久) 岡田 本間(記録)

あちこちでグループに別れ、近々行く山、夏の山などの話し合いが持たれていきましたが、締めはSさんからお話のあった「中高校生得5ヶ条カキケコ」でしょうか。

カは感激、キは希望、クは工夫、ケは健康、コは「恋」で、我ら中高校生は常日頃頭と心と身体を揺り動かすことを心掛けるようにせねばならぬ、特に「恋」をするようにとのお話でした。そこで、手を握るのか、話をするのかとかいろいろな説ができましたが、中高年の恋は、見掛けると心トキメク人を回りに数人見つけておくことに落ち着きました。

億劫がらずに、是非。

### 山行記録

佐雑 12 / 26 明神・明星・塔の峰。単独、

箱根・外輪シリーズ#3。

三井 1 / 29 南高尾山稜。37年同期、10名と。

2 / 8・9 阿蘇山・久住山。毎日新聞旅行ツアー。雪無く、アイゼン不要でした。

蛭川 1 / 25 ~ 26 高ボツチ。家族で。期待の北アの展望は駄目だったが、久し振りのアイゼン使用。

竹中 2 / 6 ~ 7 小海リエックススキー場。晴天に恵まれ、1700 ~ 1900mの八ヶ岳の東側を滑る。露天風呂は浅間山方面の景色が雄大。

本間 2 / 8 三ノ塔。懇親山行下見、ヤビツ峠から三ノ塔尾根を下る。

2 / 15 洪沢丘陵。丹沢の景色は良いが、舗装が多く歩くに不適。

### 山行予定

高橋 2 / 17 高取山(大山の下のほう)。

クラスメイトと4人で、栗原から聖峰不動経由で登る。

竹中・蛭川 2 / 18 ~ 19 八ヶ岳・天狗岳。

夏沢鉱泉より往復。佐雑・高崎(俊)の諸兄と4人で、アイゼンの世界へ。

2 / 27 ~ 3 / 1 北海道ニセコアンヌプリ他。小野さんの誘いで、バックカントリーBCスキー入門。川名さんも。

小島 3 / 8 屏風岩山。三四郎会で。

いと言いたいのではない。世界には色々な考え方がありということ、私は旅を通して体験できたことをお伝えしたい。

最後に……

今回の旅では、中村保さんにチベット探査ばかりでなく、インド人登山関係者やパキスタン人登山関係者を紹介していただくなど、大変お世話になりました。お陰様で旅に幅ができました。

香港では駐在されている稲毛尚之さんに食事をしていただきました。

カトマンズでは、同じ時期にトレッキングで来られていた三森茂充さんに食事をいただいたり、一流ホテルに格安で泊まらせていただいたりしました。

ありがとうございました。世界に広がる針葉樹会ネットワークに感謝するところです。また、旅行中に針葉樹会の皆さんからのメールに励まされました。感謝いたします。

次は、中南米やアフリカの長期旅行を考えています。その時も、宜しくお願いします。

私の、このアジア旅行については、ブログでも写真付きで公開しています(カテ「アジア旅行記」)。「田形 アジア横断」で検索すればヒットします。

平成21年3月16日

【出席者】 佐薙 三井 高橋 蛭川 竹中  
小島 高崎(俊) 本間(記録)

前日は針葉樹会山行(丹沢・三ノ塔)でしたので参加者は数人かと思っておりましたが、常連の方々にはお集まりいただき有難うございました。ただ山崎さんの欠席は残念ですが、最後の林道下りで張り切った結果でしょうか。

#### 山行記録

「針葉樹会山行 丹沢・三ノ塔」

3 / 15 山崎 佐薙 高崎 中川 仲田  
三井 遠藤 高橋 蛭川 竹中 小島 中村 西牟田 本間 14名 山行記は3 / 19 HUHACで発信。

東天狗岳 2 / 18 ~ 19 佐薙 蛭川 竹中 高崎(俊)。久し振りに寒風吹きささぶ冬山を経験(竹中)。

ニセコアンヌプリ 2 / 27 ~ 3 / 1 蛭川 竹中 小野 川名。シールを付けて登り、降りにはパウダースノーを楽しむ(竹中)。  
高橋 3 / 1 石老山 相模湖駅 ~ 石老山 ~ 道志川を渡る。

「三四郎会」

3 / 8 高橋 大室山。

竹中 中村 畦ヶ丸 宴会前に一登り。  
3 / 9 高橋 権現山(丹沢湖)。  
本間 屏風岩山。佐藤力さんと大滝峠上から二本杉峠へ。道良く、赤キレも要所に有り。

#### 山行計画

三井 4 / 9 ~ 10 猿ヶ馬場山。毎日ツアーでキャンセル待ち。  
? 御前山。  
高橋 3 / 17 日和田山。クラスメイト4人で。

蛭川 4月上旬 大ドケ(大菩薩連峰の一角)。ドツケシリーズ。  
4 / 26 生藤山。お花見を兼ねて。  
本間 4 / 3 高尾山。じじいパーティーで。

平成21年4月20日

【出席者】 山崎 佐薙 三井 高橋 蛭川 竹中 小島 高崎(俊) 岡田 金子 本間(記)

今月から山行記録用ノートを大判に切り替えました。会の常連メンバーは比較的高齢者

が多いゆえ3000m級の話はそう出ませんが、低山でも聞いたこともないような珍しい山や変わったルートはよく出ます。後岳者のため、ルート・感想などを多く書いて欲しい、というわけです。私自身丹沢の大山・北尾根や蛭ヶ岳・直登ルートを登るときにこの記録を参考にしたものですから。

#### 山行記録

山崎 4 / 13 大山。  
佐薙 3 / 19 箱根・湯坂道を上り、旧東海道東坂を下る。単独行

三井 4 / 18 釈迦が岳(1641m) ~ 神座山(1474m) ~ 鳥坂山(1101m)の縦走。御坂山塊を歩いて約5時間。桃の花(ピンク)とすももの花(白)が綺麗であった。目の前の富士山は薄雲がかかっていたが、南アルプスは北岳・聖岳の眺めは良かった。

高橋 4 / 12 日和田山。クラスメイトと4人で。飯能に日帰り浴場があった。  
高崎 4 / 10 渋 ~ 黒百合平 ~ 東天狗の手前の往復。アイゼン初めての案内を案内して、東天狗のあと100m位の所で退散。  
本間 4 / 3 高尾山。稲荷山コースを上り、ケーブル道を下る。

山行計画

三井 4 / 10 ~ 13 台湾・玉山(新高山)  
遠藤君と毎日新聞のツアーで。  
蛭川 4 / 26 生藤山。桜の名所、高校の岳  
友と。

「針葉樹会懇親山行」関係 5月 蛭川・本間、  
日程未定。夜叉神峠に下見に。 5 / 16  
夜叉神峠往復 三井 高橋 蛭川 竹中  
岡田 本間 5 / 17 三井 日向山。遠藤  
中村 仲田さんと。車定員満杯。  
高橋 中仙道の鳥居峠。中央分水嶺

平成21年5月18日

【出席者】 三井 蛭川 小島 小野 高崎  
中村 前神 山田 本間(記)

今回も懇親山行の翌日開催となりました。  
常連の佐藤さん、竹中さんは北アルプス方面  
に行っているため欠席。山登りですから、出  
張扱いでしょうか。その代わりといつてはな  
んですが、学部の糟谷さんが新入部員2名を  
連れて参加してくれました。

伊藤 研裕君 社会学部2年  
米田 卓矢君 法学部 2年  
ともに茶道部在籍で伊藤君は野球を、米田

君は剣道をやっていました。伊藤君は山登り  
の経験有り、という事で早速「歓迎山行」  
の話が持ち上がり「6月20日(土) 三つ峠  
山」ときまりました。詳細ですが、その節  
は参加方よろしく。

山行記録

三井 台湾玉山登山 遠藤さんと一緒に毎日

新聞旅行ツアーに参加、日本人12人(男

6・女5・添乗員男1)。

5 / 10 東水山荘泊

5 / 11 トンボ山荘→フツウン山荘 6

時間。

5 / 12 朝5時、玉山登頂。ご来光を拝む

2時間。山荘經由で下山、昼食後、有理山

観光(巨木・森林鉄道見学)、嘉義市ホテル

泊。

5 / 13 台北から帰京。

蛭川 5 / 10 懇親山行下見(夜叉神峠→高

谷山)・本間同行。晴天で雪ぶすまの白峰三

山に酔いしれる。昔、池山吊尾根を下った

事を思い出し感無量(本間)。

5 / 16 夜叉神峠→高谷山(懇親山行)総

勢24名(含、石原氏夫人)。あいにくのく

もり。三山見えず。幹事の不徳(雨男)の

せいか。下山後、針葉樹見学会。そのあと

アダージオに。

小島 5 / 2 白山・日向山(丹沢)。飯山観  
音、日向薬師も良かったですね。

5 / 16 夜叉神峠→高谷山(懇親山行)。

小野 4 / 8 身延山。山門への287段の

階段がきつかった。

4 / 29 三向山→大倉山。我家の近くの八

イキングコース 3時間。

5 / 4 奥三向山→大倉山→三角山。同右

4時間。

高崎 4 / 27 麦草峠→丸山→中山→高見

石→麦草峠。麦草峠のすぐ上からアイゼン

装着。前日の雪で、深雪の上を行く。

5 / 11 女神茶屋→蓼科山往復。南面ルー

トで雪は全くない。霧のかなたに北アルプ

スが見えた。

中村 4 / 13 宮之浦岳。家内、家内の妹さ

ん、長男の4人。屋久島空港→淀川登山口

→淀川小屋(泊)。

4 / 14 淀川小屋→花之江河→宮之浦岳

→新高塚小屋(泊)。夜半より風雨強し、出

発(5:35)時も強い雨。1時間ライトを

つけて歩く、途中雷もなる。宮之浦岳頂上

附近では雨がほぼ上がり、新高塚小屋まで

は楽に歩け、コースタイムより早かった。

4 / 15 新高塚小屋→高塚小屋→縄文杉

→ウイルソン株→白谷雪水峠→宮之浦。雨

上がりの快晴で気持ち良く下山できた。

4 / 18 開間岳。家内、長男と3人。好天であつたが、眺望悪く残念。

前神 5 / 3 妙義山。最も易しいルートから相馬岳登頂。

山田 5 / 1 ~ 3 剣岳。スキーをともに赤谷尾根へ、剣北方稜線へ、チンネ左稜線へ、剣岳へ、東大谷左俣滑降。吉沢先輩が初登した東大谷左俣と中川先輩が初登したチンネを継続。

#### 山行計画

三井 6 / 12 日光奥白根。丸沼から往復。

2回目

6 / 13 男体山。中禅寺湖より往復、日本百名山97座目。

蛭川 5 / 20 ~ 22 日光・鳴虫山と太郎山。

小野さん及び昼から会2名。三森さんの別荘に泊。

高崎 6 / 11・12 徳澤園。平川・石田の

追悼。

山田 5 / 30・31 策ヶ岳。鳥本・コースチャと一緒に。

### 三四郎会総会の報告

幹事 岡田 健志(昭42年卒)

2009年3月8日(日)～9日(月)  
西丹沢中川温泉郷「蒼の山荘」  
参加 17名

三四郎会総会は、山岳部OB会らしく、「登山の部」と夜の「総会・懇親会(要するに宴会)の部」の二部構成になっています。

今年はOB17名の参加をえて(08年のように、学生の参加が得られず残念でした)、中川温泉郷の「秘湯」「蒼の山荘」で開催されました。

当初計画では、8日は西丹沢の山を3グループにわかれて登り、夕方「蒼の山荘」に終結して総会を実施。9日は早々に帰宅せねばならない人もおりましたが、それ以外の人たちも、前夜の深酒が災いとなること必定で、「もつひと山」というのは現実味がとぼしいという大方の予想でした。

3月に入ってから、低気圧がいくつも襲来



中川温泉にて

し、その間の降雪がルートをおおい、現地からの情報では、アイゼン携行が必至とのことでした。直前の天気予報でも、8日の天気は曇りのち雨(平地)ということで、一応は計画通り集合するものの、天候を見ながら行けるところまでという和戦両様の構えでありました。

各パーティーの登山記録については、それぞれの報告を待つことにしてここでは省略いたしますが、8日は、時にまぶしい春の日射

しを受けての登山となり、大室山グループ、畦ヶ丸グループ、屏風岩山グループ（三森さん一人）がそれぞれに目標を達成して下山しました。

一方、総会の方はスタート1時間前から早々とはじまり、重要議題はトントン拍子に消化され、そのため正式開宴時には赤い顔で会場にあらわれる人がほとんどでした。

はじめて本会に参加された藤沢恵一さん（昭和40年卒）の自己紹介があり、次回幹事の三森さんから、抱負発表がありました。使用に時間制限のある宴会場での一次会を終えたあとも、宿泊部屋での二次会は夜の更けるまで続けられました。

8日に大室山へ登られた高橋さんが9日に権現山へ、8日に山登りできなかった本間さん、佐藤（力）さんが9日に屏風岩山に登られ、意気軒昂としたところを見せられたことを最後に特記しておきたいと思います。

## 針葉樹文庫見学会（報告）

2009年5月16日（土）

南アルプス芦安山岳館

〒400-0241 南アルプス市芦安 芦倉1570、



南アルプス芦安山岳館

電話055 288 2125

参加者：会員から25名 石原夫妻・佐雑・高崎（治）・鈴木・上原・中川・山本・有賀・永井・仲田・三井・遠藤・高橋・竹中・本間・蛭川・小島・小野・三森・佐藤（久）・岡田・斉藤・中村（雅）・西牟田。それに、蔵書旧蔵者の一人である故・山本健一郎さんのご遺族（山本昭子、山本イクヨ）。南アルプス市から、秋山農林商工部長と塩沢南アルプス芦安山岳館長。



針葉樹文庫の寄贈式を終えて

針葉樹文庫は、昨年の7月以来、南アルプス芦安山岳館（以下、山岳館）に開設すべく準備を進めてきた。その見学会を、恒例のアドージオ懇親山行の機会を利用して実施した。芦安は、北岳の玄関口。その北岳を仰ぐ夜叉神峠・高谷山の往復を幹事企画山行として組み合わせることにした。幹事企画山行、見学会、アドージオでの懇親会と欲張った計画になったが、マイカー参加者のご協力を得て順調に移動でき、ほぼ滞りなくスケジュール

ルを消化した。

夜叉神峠から下山して、14時頃から山岳館の情報コーナーで図書の寄贈式。竹中針葉樹会長が、挨拶をして、図書目録『針葉樹文庫解題』と『針葉樹』第9号を秋山部長に進呈。これに対して、秋山部長と塩沢館長から寄贈を受け入れる旨の謝辞があった。文庫開設は、芦安を往来して北岳バツトレスに挑んだ小谷部全助先輩が取り持った縁と言えなくもない。そのことを象徴するものとして、500冊をこえる寄付図書を『針葉樹』第9号で代表させたものである。塩沢館長は、「ご挨拶の中で、「小谷部全助が活躍した商大山岳部は私の心の中で存在感がありました」と吐露され、また「自分が歩んできた青春の証拠として山岳書を大事にしたいと思っています。その気持ちは皆さんも同じと考え、針葉樹会の依頼を少しでも実現したいと思いました」、「自分がいなくても文庫が後世に伝えていられるようにしたい」と述べられた。

山岳図書コーナーに移動して、本棚の前で、針葉樹文庫開設式。文庫の概要を記した説明パネルを上原さんが紹介し、それを受け取った秋山部長と蛭川が本棚側板に両面テープで貼り付けた。また、「針葉樹文庫」という三角プレートを天板に載せた。これで、針葉樹文

庫の公式開設となった。最後に、石原さんと山本夫人が、南アルプス市に対して御礼を述べ、また今後の図書保全をお願いした。

式を終えて、館内を自由見学。展示室では、小谷部全助、森川眞三郎、望月達夫、佐々木誠、大塚武らの諸先輩が芦安の宿で記帳した「宿帳」やその説明パネルを見学した。

16時頃、日帰り組5名を除き、遠路をアダージオに向かった。

『針葉樹文庫解題』の眼目は文庫の図書目録とそれに関連する凡例と人名索引であるが、文庫設立の経緯や背景、所蔵図書の構成、文庫としての性格や特色などを多岐にわたって「解題」した文章を巻頭に載せた。また、図書旧蔵者（増山清太郎・山本健一郎）の随想など8編の短文を付録として収めた。この冊子は、山岳館に置いて来館者希望者に配布するほか、針葉樹会員全員に配布する（見学会参加者などには渡しずみ）。また、広報の目的で、会員有志を通じて他大学山岳部関係者などにも配布することになっている。

物故会員遺族から整理を依頼された蔵書が、転じて、一橋山岳部、針葉樹会アーカイブとしての針葉樹文庫となった（その経緯は『針葉樹文庫解題』を参照）。瓢箪から駒ではあるが、できたからには、会の事業としてそ

の保存、充実を図りたい。さらに、芦安ひいては山岳館への訪問者を増やすための公的行事などが主催、共催できたらずばらしい。

最後に一言。山岳館には、針葉樹文庫を含めて、約一万冊の山岳書が収蔵されている。ほとんどの本棚は、開架式である。針葉樹文庫を含む一部は、貴重図書としてガラス戸棚が施錠されているが、頼めば開けてくれる。新緑や紅葉の盛りに御勅使川の河原にでもテントを張って、山岳館に通い、思う存分山岳書に読みふける。目が疲れたら日帰り温泉に浸る。天気を見計らって夜叉神峠を往復して北岳を眺めてくる。「嫁の在所に孫抱きに」の境地である。

（蛭川・記）



入山～事故発生～下山までの経過

佐藤 活朗（昭53年卒）

3月20日（金） 晴

三連休初日のこの日はゆっくり入山し、ト泊、翌日、日帰りで本山を往復して下山し帰宅する計画だった。午前7時、小田急線鶴川駅前に3名集合、前神の車で出発。昼過ぎ妙高市着後、市内で食糧購入と昼食。杉ノ原スキー場に向かい駐車。リフトを乗り継ぎ、最後の第三リフトを降り500m程歩いた雪上に午後4時過ぎテントを張る（1870m）。その夕は鍋を囲んで歓談。就寝した9時頃、前神の携帯に友人の訃報が入る。夜間は快晴強風。

3月21日（土） 快晴

7時10分 スキーは担いで出発。雪は締まって歩きやすい。近藤が速いペースで先頭を歩き、2人は遅れて続く。

8時30分 外輪山稜線（2250m）着。本山登頂ルートを観察。正面（南側）は急峻で、近藤が持参した記録にある左（西）側が傾斜が最も緩く、ルートとして適当にみえる。

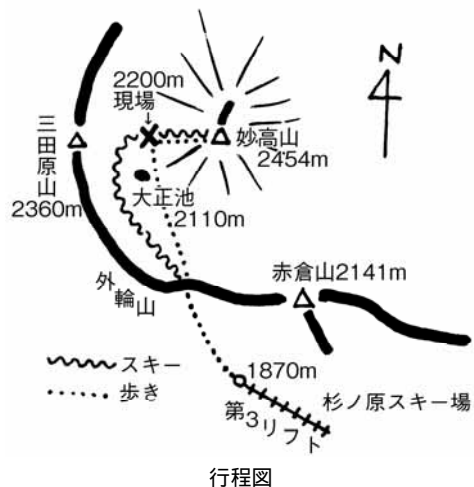
8時40分 スキーを履き、近藤先頭で外輪山の内側斜面を斜めに横断滑降。途中のデブリ数本の横断に少し手間取る。先行した近藤は、大正池（当時は雪原）の先の外輪山側斜面で5分程立ち止まり、登路の沢を観察していた。

9時20分頃 登路の沢の入口（約2100m）に着く。写真1。

見上げたところ、沢は全面樹木に覆われ、雪面が頂上稜線まで続き、岩場はない。ここから登ることに決める。

9時30分 沢を登り始める。3名ともここからアイゼンを装着、近藤のみスキーを携行、他2名は休憩した場所にスキーを残置。他2名は近藤ほどのスキー技術はなく、この沢は樹林が多くて上部で傾斜が増すので、歩くほうが楽で早いと思った。

沢は上部に行くに従い予想通り急になったが、雪は概ね靴が少し潜る程度、ところにより深く潜るといった状態。樹林内の登りは容



行程図

易で危険は感じない。

10時55分 順調に高度差3000mを登りきり、稜線の鞍部に到着。近藤・佐藤は鞍部にスキーとザックを置き、稜線の深い雪をラッセルして数百m先の妙高本山頂上に向かう。前神は以前に登頂済みだったため、頂上には行かず鞍部から一足先に下降。

11時05～15分 頂上（2454m）。2人とも初登頂で、佐藤が日本百名山69座目だと言つと、近藤は70座目と返す。快晴で360度の展望、北アルプスなど四囲の山々を確認。写真2

11時30分頃 近藤・佐藤2人は鞍部に戻り、佐藤はスキーを履いている途中の近藤に

「先に行くよ」と声をかけ、出発<sup>\*1</sup>。

近藤の滑降を写真に収めようと思いい、佐藤は歩きながら後ろを注意していた（スキーは移動が早いのでシャッターチャンスが短い）。高度にして50m強下降したあたりで鞍部の方向からスキーの滑る音を聞いたように思いい、見上げたが樹林が密で近藤の姿は確認できなない。その後何度も振り返りながら、ほぼ真つ直ぐに（上から見て）やや左寄りを下る。下部斜面まで来ても近藤と行き違わないので、先ほどの出発したらしい音を聞いた時刻からして、右側方を追い抜いていったが樹林に遮られて気がつかなかったものと、このときの佐藤は思った。

12時10分頃 出発点で待つ前神と合流し、近藤未着が判明。2人は不可解な気持で上部に向け「ヨ、ヒトツツ」、「近藤！」と声をかける。数回呼んだ後で、意外に近い上方から弱々しい返答が聞こえる。姿は見えない。異常を感じ、声の方向に向かい2人で登り返す。10分弱で、先着した前神がスキーを履いたまま林間斜面のブッシュで倒れている近藤を発見（12時30分）<sup>\*2</sup>。

すぐにスキーを脱がせ、斜面に段を掘って座らせる。顔に出血と腫れがあり、しきりに右足大腿部と右腕の痛みを訴える。見たところ脚腕には外傷・出血はないが、数秒おきに

右足の位置を動かすように求めるので、付ききりに対応する。意識と記憶が混乱している様子で、「何メートル滑ったのか」、「ここはどこか」など何度も聞く。このように発見時は意識があり、ある程度の会話はできた。その後、時間の経過とともに意識の混濁が進み、発語は次第に不明瞭になった。

2人は、近藤は立木に激突して頭（顔）を強打し、大腿部も骨折の可能性があるかと判断で救出を要請することにする。現場は谷間で携帯電話が通じないので、携帯が通じると思われる外輪山稜線まで佐藤が戻って連絡、前神は近藤に付き添うこととする。

12時45分 佐藤が現場を出発。その後、前神は、佐藤が沢の出発点に置いていったツェルト（避難用テント）を取りに往復し、現場でツェルトを張り近藤を収容し、介抱を続ける。

13時30分 大正池（外輪山の斜面を登り返した佐藤は、斜面上部で携帯により警察に事故を通報し、救助を要請。警察と二度やり取りがあり、13時50分頃、ヘリが14時00分、新瀧空港を離陸予定、45分後に現場に着く）との連絡を受け、急ぎ現場に取って返す。

14時30分頃 佐藤は現場に戻り、前神とヘリを迎える準備をする。

14時50分頃 ヘリが飛来、本山・外輪山周囲をしばらく旋回するも、「強風のため接近できない、後刻再度来る」と外部スピーカーから呼びかけ、いったん去る。

救出が先になったので、ツェルトをしつかり張りなおし、それまで斜面に座っていた近藤にジャケットを重ね着させ、ツェルトの中に寝かせる。励まし、少量の水を飲ませたが、意識混濁が強まり、意味のある会話はできなくなる。

17時30分頃 再度ヘリが飛来するが、まとも強風で接近できない。しばらくして、「本日は救出断念、明日手立てを講じる。今晚のため物資を投下する」との呼びかけがあり、少し離れた場所に毛布3枚・寝袋1、水、コンロ、鍋、乾パンの入った袋が投下される。前神が投下物を回収したことを確認してヘリは去る。なお、投下物のほかに前神、佐藤は昼食2回分程度の食糧、温かいコーヒーの入ったテルモス、飲料、非常用固形燃料を携行していた。

投下された毛布で近藤を包み2人で励まし続けるが、次第に声と身体の動きが弱くなる。日没で暗くなり2人は携行のヘッドランプを点灯して付き添う。

19時20分 眠るように息を引き取る。すぐ心臓マッサージ・人工呼吸を始め、20分間



写真2 妙高山頂上(11:10)にて、近藤。



写真1 9時25分頃、沢の入口にて(右・近藤、左・前神)。背景は外輪山の三田原山。



写真3 発見現場\*3より上部を見たところ。写真右上のブッシュが血痕、装備を発見した場所(回りの足跡は佐藤のもの)。

続けるもついに蘇生せず。そのまま3人ツエルト内にとどまり夜を過ごす。空は晴れているが終夜強風。

3月22日(日) 曇り暴風雪

6時00分 2人は早く家族・警察に連絡する必要があると考え、前神が外輪山稜線に向かい現場を出発。佐藤は現場にとどまる。

7時頃 前神は外輪山に到達し、携帯で警察・家族に連絡。この頃から山域は低気圧による暴風雪となる。

10時頃 前神は連絡した際に早朝出発した救助隊(消防・警察合同)との合流を指示されていたが、吹雪の中で救助隊とめぐり合えず、偶然出会った山スキーヤー一行とともに杉ノ原スキー場に下山。

11時10分 救助隊7名が現場に到着、佐藤は前神の無事下山を知る。救助隊はすぐに搬出準備と現場検証にかかる。この頃いったん吹雪は小康状態となり視界は数百mまで回復。

12時頃 遺体とともに現場を出発。谷底まで下ろした後、大正池までの緩い登りを牽引する。吹雪が再度強まり、気温と視界が急低下する。

13時過ぎ 大正池雪原着。救出本部との無線交信の結果、天候・時間・外輪山の急斜面

等、引き上げの厳しい条件により本日の搬出を断念、目立つ立木のもとに遺体を安置し、回収を確実にするためGPSポイントを確認、一同黙礼のち現場を離れる。救助隊と佐藤は斜面を上り、引き上げ支援のため外輪山で待機していた他の救助隊メンバーと合流、15時30分頃スキー場最上部に下山。

#### 事故の状況の推定

前神、佐藤とも事故を目撃しておらず、本人の記憶も失われていたため、正確な事情は不明。以下は佐藤の推定である。

現場は扇状に広がる下部斜面の中ほどにあり、斜度は上部より緩い20度強。写真3のように太い樹木と細く低いブッシュがまばらに生え、積雪は1・5m程度。通常のスキー技術があれば、樹木を避けて滑ることはさほど困難ではなく、近藤君の優れた技量からして、致命傷を負うほどの激しさで太い立木に衝突した原因を単なるスキー操作の誤りに求めることは無理があると思われる。

以上から考えられる一つの可能性は次の通り。

上部斜面は狭く急で樹木が密なため思いうように滑れず、慎重に時間をかけて通過したようやくスキー向きの下部斜面まできて、大胆にテレマーカーターンを始め、スピー

ドも増した。

快調に滑降の最中に突然めまい\*5に襲われ、瞬時意識が遠のいた。スキーにスピードがつき、回避姿勢をとれないまま、運悪く数少ない太い木に顔(頭)と体?を激しくぶつけ、転倒した。

\*1 佐藤はスキーで滑降する近藤より下降に時間がかかると考え先発した。元気な近藤を見たのはこのときが最後になった。

\*2 現場は大正池の北東約500m、高度2200mの地点。下降時の状況を総合すると、歩いて下りる佐藤の約200m右(上から見て)を、スキーの近藤が追い抜くあたりで事故が起きたものと推定される。なお、現場は尾根状の隆起のため佐藤の下降路からは視界外で、物音や気配も感じなかった。

\*3 へりを待つ間に事故が発生した場所を探したところ、近藤を発見した地点の10mほど上部のブッシュで、血に染まった雪面(直径30センチ大)及びサングラス、ストック2本、帽子を発見した(装備は回収した)写真3。激突した場所はさらに上部とみられるが特定できず、雪が締まっていたためスキーのシュプールも見つけられなかった。また、発見時本人の履いていたスキーにとくに損傷はなかった。

こうした現場状況から、本人は激突後倒れ滑落し、装備が残されていた場所ですったん停止、そこで出血した顔面を雪に接し装備を外した後、再び斜面を10m程滑落し、発見現場のブッシュに引っかかったと推定する。事故発生時刻は正午頃と思われる。

\*4 検死の結果では、四肢に骨折はなく、死因は「頭蓋内出血」とのこと。

\*5 数年前、本人が「めまいがするので通院・服薬している」と佐藤ほか複数に話している。最近公私ともに充実し、頻繁に出かけていた山スキーでは元気そのもので、健康不安の様子にはなかった。結局、事故との関連は分らない。

(4月20日記)

### 妙高山遭難 在京連絡先報告

金子 晴彦(昭46年卒)

遭難は突然やってくる。残された者がどこまで何ができるか? 仲間同士の理解と友情に頼るしかない。今回は最悪の事態ではあったが、針葉樹会としてできるかぎりのことは

できた。にわか在京連絡先となり、会員諸氏に突然の現地出勤要請を頻発し、ご迷惑をかけた立場として改めてご協力に感謝するとも概要を報告したい。

一体何が起こったのか、起こっているのか？ この確認が第一歩だった。3月21日の夜、西牟田がエエアに「近藤が妙高で怪我をしたらしい」との情報を流した。電話してみると「詳細不明だが木にぶつかって骨折したらしい」とのこと、「そうか」と受けた。ところが10時に加藤(博行)から連絡が入り、「どうも大変らしい。骨折どころではないらしい」との話が変わった。途端に血の気が引いた。

3月8日に八ヶ岳の天狗岳で転倒して以来調子が悪く、自分はとも出勤できる状態にはない。どうするか？ 加藤は明日朝6時半に妙高の現地本部に出勤する予定だが応援が欲しいという。自分が在京連絡先となるしかないと判断、早速、西牟田に現地での連絡のために出勤を要請し、快諾を受けた。

次いで山の中へ入るメンバーも必要だと考え、山田に電話した。山に出かけていてその夜遅く帰るとのことだった。そんな状態ですぐさま山へとんぼ返りできようか？ 加えて井草、引地にも連絡して可能性だけを確認した。いずれも必要であれば動くと言ってく

れた。夜11時、帰宅した山田と連絡がとれて彼も明日出勤してくれることになった。西牟田と連絡しあい車で出かけてもらうことにした。第一次の応援体制ができたものの落ち着かない夜を過ごした。

事態は最悪だった。翌3月22日の6時30分、現地に着いた加藤から7時02分に「近藤は亡くなった。ヘリで降ろすしかない。ご家族が妙高に向かっている」との決定的な連絡が入った。

一体何が起こったのか？ そうなると遺体の搬出と、同行している前神と佐藤(活朗)の無事帰還が目標になった。7時36分、前神の携帯に電話を入れた。思いがけず電話の向こうから前神が応じた。その時、彼は救援隊と合流すべく、外輪山の稜線にいた。「すみません近藤は亡くなりました。今、救援隊を待つて稜線にいます。いつもの明瞭な声の向こうで吹雪がうなっていた。そしてほとんど電池切れで通話は途絶えた。前神が一人で吹雪の稜線にいる。無事に帰れるのか？

加藤が川名に若手の出勤候補をあたってもらうことにした。その後、宗像、川名からも出勤可との連絡が入った。松尾からも出勤可と入った。これで相応の人数は揃った。越後湯沢にいた古田は急遽妙高に向かい9時には加藤と合流した。西牟田と山田は9時に豊田

を出発した。川名はご家族対応のためにも直ちに出勤したいと言ってくれた。

前神が下れるかの心配はあるものの、会員が救援に山に入る必要は消えつつあり、また、加藤がずっと現地にいるわけにもゆかず、事務処理に主眼を置いた第2次隊の出勤が必要と思われた。そこで中村(雅明)さん、川名に連絡、出勤をお願いした。二人で連絡しあい電車で出発してもらうことになった。さらに、遺体収容に時間がかかった場合、現地詰めの交代が必要と思われ高崎さんにも連絡、お出掛け中だったが明日なら出勤可と快諾をいただいた。

11時、加藤から前神無事下山の連絡が入った。ふっと力が抜けた。山中対応として待機していただいているメンバーにHUAACを通じて待機解除を流した。それからは遺体収容がいつになるかを待つ状態となった。

16時、佐藤も救援隊と共に下山し、二重遭難は回避された。ヘリは強風のため現地に行けず、遺体は現場に残された。夜、加藤、古田、山田は対応を中村、西牟田、前神、佐藤、川名に引き継ぎ帰京した。実に長い日曜日だった。

翌3月23日、悪天のためヘリは飛ばず、高崎さんの出勤のタイミングは計りかねたが昼前に車で出発した。高崎さんが到着後、西牟

田、前神、佐藤が対応を引き継ぎ帰京した。会社で仕事をしながら現地との連絡を繰り返す月曜日となった。天気予報では明日の午後以降冬型になるとのことだった。

翌3月24日、11時過ぎわずかなチャンスを生かしてヘリが現場に飛び遺体を収容して戻った。その連絡を受けて4日間の在京連絡先の任務は終わった。出勤いただいた会員、待機いただいた会員、そしてかたずをのんでH U H A Cをご覧いただいた会員、皆さんに感謝。近藤君に合掌。

## 妙高山遭難 現地での対応

中村 雅明(昭43年卒)

3月23日

朝、薄日が差していたが相当の強風であった。ヘリが9時過ぎには飛来するかと待ったが、乱気流のため飛来できない旨の連絡が妙高警察からあった。その後、16時近くまで、ヘリは新潟空港で待機するも強風が収まらず、遺体収容を翌日に持ち越した。

8時30分頃 近藤夫人の弟さん、近藤君の娘さんが電車で帰京した(葬儀準備のため)。川名さんも同じ電車で帰京した。

9時05分 妙高警察署の大島課長に電話するも、早朝会議で不在。

9時11分 再度、大島課長に電話するもまだ早朝会議中で状況確認できず。

9時35分 大島課長より電話あり。ヘリは現場の乱気流のため飛べない。風が収まれば直ぐ飛び立てるように待機中。待機のタイムリミットは16時。

10時40分 高崎さんに電話。現地来援要請

11時41分 大島課長より電話あり。前神さんの山行歴の照会 前神さんに取り次ぎ。

13時51分 近藤君勤務先社長の平井氏から電話あり。状況確認。17時頃再度連絡要請あり。

13時15分 東京連絡本部の金子さんに電話。状況報告

15時50分 大島課長に電話。状況確認、本日の遺体収容はなし。明日は好天の見込み。ご家族にお伝え。

15時52分 高崎さん到着。直ちに打ち合わせ

せ 西牟田さん、前神夫妻、佐藤夫妻は帰京する。

24日以降の現地対応は高崎さん、中村で行う。

16時20分 前神夫妻、佐藤夫妻は前神さんの車で帰京。

西牟田さんは前神さんの車に妙高高原駅まで同乗。電車で帰京。

16時57分 平井氏から電話あり。状況問い合わせ。

## 甲 辞

近藤泰君、

春浅い快晴の日、妙高山の頂上を窮め、喜びあつた直後、突然君は我々の前から去っていきました。

振り返れば、一橋大学の山岳部に私から一年あとに入部した君と知り合つてから、三十五年の長い付き合いでした。君は周囲の誰もが好漢、畏友と認める仲間でした。君は体力・技術に優れていただけでなく、生来の明るい性格から若い世代とも分け隔てなくつきあい、また、家庭と仕事を終始大事にする人でした。

君は一貫して、一ヶ所にとどまることをよしとせず、前向きに課題を見つけ挑戦することが好きでした。若い頃、率先して難しいルートに挑戦していた君が、中年になってからテレマークスキーを始めたのには驚いたものです。しかも、熱心に練習に打ち込み熟練の域に達しました。このたび、君が最も好み、得意でもあつたスキーで事故にあつたのは不運というほかありません。

山岳部の、自然の中で苦楽を共にする全人格的な付き合いを通じて、私にとって君は尊敬すべき生涯の友となりました。君との付き合いは中年となつてからさらに深まり、父親として、社会人として、相談しあつたり、特にこの十年ほどは山やスキーに同行する機会が多くなりました。中年になつても衰えを見せない君の

体力・技術・意志にはとうとう追いつけなかつたが、長い交友を通じて、体力や性格は違つていても、お互いに自分にならないものを感じあう関係になつたと感じていました。

私にとって君の前向きな生き方はいつも大きな刺激でしたし、君と酒を飲みかわすのも、山やゴルフに行くのも本当に楽しい時間でした。いま目をつぶり、君と共にいた多くの場面を思い出すと、そこに出てくる君はいつも笑顔です。私は、君とこれからも年を重ねていくことを楽しみにしていました。君が去つた今、それはかなわぬ夢となりました。

近藤君、君がいてくれたことで私たちの人生は楽しく、充実し、思い出深いものになりました。私はそのことを君に感謝することばを知りません。この気持を生前の君に十分に伝えられなかつたことが残念です。

思えば君は、若い頃のひたむきさそのままに、人生を全力で駆け抜けたのだと思う。

近藤君、君が愛して止まなかつた山々に抱かれて、今は安らかにお休みください。  
合 掌

平成二十二年三月二十七日

佐藤 活朗

## 平成20年度会費納入のお願い

平成20年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら会計幹事までEメール／電話にてお問合せ下さい。

### ◇会費納入先銀行口座

- (1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
- (2) 口座名 針葉樹会
- (3) 口座番号 普通口座 4825647
- (4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

◇会費額 卒業年次によって左記のようになっています。

- ①昭29年以前の卒業(昭29を含む) 免除
- ②昭30～42年の卒業 4000円
- ③昭43～62年の卒業 6000円
- ④昭63年以降の卒業 5000円

### ◇幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)

E-Mail Kat.Miyashita@mitsui-steel.com

電話(会社) 03-5544-6925

Fax(会社) 03-5544-6483

(三井物産スチール・第二部門造船鋼材部)

## 編集後記

◇会員に御心配いただきました妙高山での痛ましい遭難について、近藤泰さんの御冥福を心からお祈りし、まずは関係者からの報告をお届けいたします。追悼文集については改めて掲載すべく故人と特に親しかった会員の間で御検討いただいています。編集方針の変更と針葉樹会総会に間に合わせるべく努力いたしましたので、折角原稿をいただいたのに掲載が次号に回るケースも出ました。ご協力いただいた会員にお詫びいたします。

一般の寄稿では今回もキリマンジャロ紀行、北海道の山スキー、アジア旅行など、いろいろな形で山・旅を楽しむ報告が集まりました。これらの報告を読むにつけ、事故を防ぐ努力を更に続けねばとの気持ちを強くいたしました。(小島)

◇(訂正)前号の若林さんの原稿で、「藤本先輩に連れて行っていただいた、ほとぼるの水量が圧倒的だった南アルプスの奥西河内沢」の部分で、藤本先輩とあるのは編集部の勘違いで直したもので、正しくは藤田先輩でした。

昨年夏に一橋山岳部のホームページが開設されたことはご存じかと思いますが、アクセス数がいま一つ伸びていない状況です。針葉樹会報に載らなかった会員の山行報告や写真、トピック

ス、会員の近況はじめ、行事予定や山行計画なども掲載されていますので、ぜひご活用ください。もちろん投稿もどしどしお寄せください。写真だけでもかまいません。一部、パスワードを入れないと開かないコーナーがありますが、一橋山岳会のアルファベット略称を入れれば開きます。

このほどついに、パソコンをウインドウズからマックに乗り換えました。LANやプリンタの設定が面倒ではないかと心配しましたが、線をつなぐとほとんど自動的に立ち上がったのには感激でした。けっこう中高年向きのマシンかもしれません。(井草)

◇仕事でサバイバル登山家・服部文祥さんをインタビュしました(二月刊「ジュニアエラ」7月号)。アクのある方かと思いきや、とても感じがよく、謙虚な方でした。中でもおもしろかったのは「鹿や猿は迷わない。人は目的地や約束があるから迷う」という発想です。しかも、ご当人は体力も技術力も山で食料調達する能力もあるし「たとえ迷っても日本の山なら一日中歩き続ければ(残念ながら)絶対、どこかに着いてしまう」と。さすがですね。でも、できない者はそれなりに近場でいっぱい楽しめるよさもあるなど感じた次第です。(川名)